

## 〔書 評〕

水島治郎

『隠れ家と広場

移民都市アムステルダムのユダヤ人』

(みすず書房, 2023年)

土 倉 莞 爾

### 目 次

1. はしがき
  2. 本書の梗概
  3. いくつかの論点
- 参考文献

## 1. はしがき

行政学者前田健太郎は、『朝日新聞』朝刊（2023年08月05日）の読書欄で、「寛容な町戦時下の迫害と抵抗」と地味なタイトルだが、内容は素晴らしい「書評」によって本書を紹介している。重要な箇所をいくつか抜き書きしてみよう。

『アンネの日記』の物語は有名だ。では、その他のユダヤ人はどうなったのか。この問いに答えられる人は多くあるまい。本書は、アンネ・フランクの物語をアムステルダムの歴史の中で語り直すことを試みる。

ナチスの台頭に際してアンネの一家がアムステルダムを移住先に選んだ理由は父親の商売上の人脈だった。だが、この町は歴史的にも宗教的な少数派に寛容な「隠れ家」であり、多くのユダヤ人が住み着いていた。同時に、そこは多様な人々が交わる「広場」の町でもある。

しかし、この寛容な町は戦争で一変する。オランダ政府だけでなくユダヤ人団体までがナチスに協力し、約7万人のユダヤ住民の大半が犠牲になった。

アンネの静かな隠れ家の外で展開した劇的なドラマの数々は、胸を打つ。重要なのは、こうした物語が近年になって発掘されたということだ。その背景には、オランダ社会の変化がある。自国をナチスの協力者として見直す中で、苛烈なユダヤ人迫害の実相と、それに対する多様な抵抗が新たに見出されたのだ。

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）

前田は、「豊かな歴史を紡ぐ道は記憶の継承だということを、本書は読者に強く印象づけるだろう」と「書評」を結んでいるが、まさにそのとおりである。

次に、セルビア共和国首都ベオグラード在住の詩人山崎佳代子は、『日本経済新聞』朝刊（2023年08月12日）の読書欄に、「オランダ人ユダヤ人史」と題する、これも素晴らしい「書評」を載せている。こちらも、重要な箇所をいくつか抜き書きしてみよう。山崎は次のように述べている。

1933年、ヒトラーが政権を掌握すると、ドイツからユダヤ人がオランダに逃れ、アンネの家族もアムステルダムに移り住む。だがアンネが明るい少女時代を過ごした広場にもナチズムの影が忍び寄る。

著者（水島）は同時に、民族排他主義になじまぬはずのオランダが、ナチス・ドイツと協力したことにも触れる。

オランダ鉄道は、強制収容所へ多くの犠牲者を移送した。

ユダヤ孤児問題は、重たい。戦争を始めるのは大人だ。戦争は子供を弄び、アイデンティティをも奪う。『アンネの日記』を今夏読み返したい。

「『アンネの日記』を今夏読み返したい」と山崎が述べるところが感動的である。おそらく著者水島の本書の読者も、皆そう思うのは間違いないだろう。

## 2. 本書の梗概

目次にそって、本書の梗概を記しておきたい。そのためには、本書のもっとも重要部分だと考えられるいくつかの言説に絞り、その部分を抜き書きしておきたい。ただし、たとえ「書評」と言えども、ただらと抜き書きのオンパレードは好ましくないので、できるだけ多くのコメントを付随させることにする。

### 序章 「隠れ家」と「広場」

#### リュテ首相による公式謝罪

2020年1月、アウシュヴィッツ強制収容所が解放されて75周年を迎えたことを記念し、各地で追悼行事がおこなわれた。なかでもオランダ・アムステルダムにおける追悼式典（1月26日）では、マルク・リュテ首相が、はじめて公式にユダヤ人やロマ、シンティへの迫害についてオランダ政府の過ちを認め、謝罪をした（水島 2023, 1）。

実は、2012年の段階では、リュテ首相はこのような公式謝罪を行うことを拒んでいた。同年、右派ポピュリスト政党・自由党の指導者ヘルト・ウィルデルスは、リュテ首相に対し、ユダヤ

人迫害におけるかつての政府の責任を認め、謝罪するよう求めていたのだ。しかしリュテ首相はこれに対し、謝罪するに足る十分な情報が得られていないとして、取り合わなかった（同、4-5）。

コメントすれば、ここにポピュリストの現政権批判の姿勢が明瞭に現れている。オランダの現政権は攻撃されているわけである。とはいえ、ささやかであるにしろ気になることは、ヨーロッパのポピュリストは、本来、反ユダヤ主義ではなかったか、ということである。

### 「ユダヤ人の護り手」

しかし、それよりもはるかに重要なのは、著者水島が次のように述べている箇所であろう。

「ユダヤ人の護り手」としての戦後当初のオランダの自己イメージは、次第に色褪せていく。1960年代以降、オランダのユダヤ人迫害に関する調査研究が進み、また沈黙を破って過去の凄惨な経験を語る生存者も多数現われ、迫害の実態が明らかにされたことが大きかった。しかもオランダでは、ユダヤ住民の実に7割強もの人々がホロコーストの犠牲になったこと、しかもそれが他のドイツ支配下にあった西欧諸国とくらべると、格段に高い比率だったことが広く認識されるようになると、「英雄的な抵抗」や「ユダヤ人の護り手」といった自己認識は大きく揺らいだ(7)。

### アムステルダムという空間

水島によれば、16世紀以降、各地から移民の集う町として発展したアムステルダムには、オランダのユダヤ人の大半が移住し、長年にわたってその宗教的・社会的な拠点となってきた。そしてユダヤ人の多くの強制収容所への移送もまた、このアムステルダムから行なわれている(8-9)。

アンネ・フランク(1929-1945)も、ドイツから一家でアムステルダムに移り住み、そこから市内の幼稚園、小学校、中学校に通っている。また1942年から2年あまりを過ごした「隠れ家」もまた、アムステルダムの中心部に位置していた。水島の表現によれば、10年を超える少女期をアムステルダムで送った「文字通りのアムスっ子」だったのである(9)。そして、水島は、本書の目的を以下のように述べている。

本書では、アンネのいた街、「移民都市」として知られるアムステルダムを舞台としつつ、そこに住んだユダヤ人たちの近現代史を扱う。「寛容」で知られたオランダで生じた、多数のホロコースト犠牲者。この「逆説」を念頭におきながら、アムステルダムという都市空間に可能な限りこざわり、そこに生き、アムステルダムの街を歩き、そして運命の分かれ道に立たされた人々

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）

を描きたい。

もし、オランダを代表する歴史的人物を挙げよといわれたら、アンネ・フランクと17世紀の思想家、スピノザは确实最上位に入るだろう（9）。

まるで水島の息づかいが聞こえてくるような好文章だと思われる。

「隠れ家」から「広場」へ

水島は次のように述べている。2024年の現在、非常にリアリティがあり、教えられる。そして、以下のメッセージこそがこの書の一番モチーフになっているといえると思う。

不寛容と分断が各国で進行し、新たな戦争が勃発している現在、かつてのアンネ・フランクがそうであったように、生まれた国を離れ、安住の地を求めて彷徨う難民が多数生まれている。そのような時代にあって、「隠れ家」ではなく「広場」をふたたび私たちのものにしていくために、移民都市アムステルダムにしばし拠点を構え、歴史のなかに手がかりを求めていきたい（11-2）。

## 第2章 「寛容の国」オランダ共和国の光と影

アムステルダムに根を張って

そもそも、17世紀も戦間期も、アムステルダムは変わらずユダヤ人に「開かれた」都市であった。制約はありつつも、ビジネスを展開し、宗教活動を実践し、表立った迫害をうけることはほとんどなく、都市社会の一員として市民生活を営むことができた。近代ヨーロッパに栄えた数ある都市のなかでも、アムステルダムはユダヤ人にとり、相対的にもっとも多くの自由を享受できた都市の1つである（14-5）。

コメントすれば、著者水島が控えめに、「ユダヤ人にとり、相対的にもっとも多くの自由を享受できた都市の1つがアムステルダム」であると述べているが、評者（土倉）が思うに、このフレーズは、まるで通奏低音のように、この書全体に行きわたっていると思ったのである。オランダ政治学者水島の真髄を見た気がしたのである。

「隠れ家」空間としてのオランダ

「他の諸国と比較したとき、オランダにおける民族や宗教を「許容度」が相対的に高かったことは否定できない」（18）と水島は言う。

まず、西欧政治思想史の主役の1人、ジョン・ロックはオランダで亡命生活を送り、『寛容についての手紙』（ロック、2018）を執筆し、オランダで1689年出版した。イングランド王党派による追及を逃れてオランダに渡り、しばしの隠れ家生活を送った（1683-89年）（19）。

次に、フランス出身で、同様に「寛容」の大切さを訴えたピエール・ベールもまた、1681年、プロテスタントへの迫害を逃れてオランダに亡命した(20)。

第3に、ベールと同様フランス出身のデカルトも、オランダに長期にわたって滞在した。『方法序説』(1637年)を執筆・刊行したのもオランダだった。水島によれば、デカルトは同書で「きわめて繁華な都会にある便利さを何ひとつ欠くことなく……孤独で隠れた生活を送ることができた」と述べ、アムステルダムをはじめとするオランダの生活を高く評価した(20)。水島は次のように続ける。

このように、オランダ共和国という空間は「異端」の思想家たちの「隠れ家」的な空間、いわば「アジール」として機能した。もしオランダが独立して機能しなかったら、ヨーロッパの精神史も大きく変わってしまったことだろう(20)。

かなりのオランダ、アムステルダム礼賛であるが、それこそが、水島政治学の原点ではないかとひそかに考えたりもしている。

### 第3章 19世紀アムステルダム、都市改革の夢——サルファーティの約束の地連邦共和国の終焉と「解放」

18世紀末のオランダでは、独立戦争の英雄オランジェ公ウィレムに連なるオランジェ家の総督や門閥市民からなる旧来の支配層と、啓蒙思想の影響を受けた愛国者派の対立が表面化し、弾圧をうけた愛国者派の多くが国外、とくにパリに亡命していた。そして1794年末、フランス軍と愛国者派の「バターフ軍」がオランダに進入し、翌年1月にはアムステルダムを占領、総督ウィレム5世はイギリスに亡命する。こうして事実上フランスに従属したかたちながら、バターフ共和国が成立した(35)。

新共和国ではさっそく国民議会が設置され、政教分離や信教の自由などを定めたが、とくにユダヤ人にとって重要だったのは、1796年9月、ユダヤ人に共和国市民と平等の権利を保障すると宣言したことである。これ以後、ユダヤ人は職業選択の自由など諸権利をほぼ全面的に獲得したほか、参政権や公職就任資格も非ユダヤ人と同等に保障された。これによりユダヤ人差別は、公的にほぼすべて廃止された。それゆえ1796年はユダヤ人にとって「解放」の年として記憶されている(35)。

1813年にナポレオンが敗北し、フランス支配が崩壊すると、イギリスの後ろ盾のもとで、オランダにはウィレム5世の息子が帰還し、国王(ウィレム1世)として即位した。こうしてオランダは保守的なウイーン体制下で王国として再出発する。しかしこの保守反動の時代にあっても、ユダヤ人の「解放」措置が撤回されることはなかった(35-6)。

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）

ここで、一言コメントすれば、「ユダヤ人の『解放』措置が撤回されることはなかった」が重要である。王国であっても、歴史は進歩し、「解放」の制度は残った、と言ってもよいのではないだろうか。ただし、著者水島は、次のように留保を付けている。

しかし政治的な権利は保証されたものの、多くのユダヤ人が貧困に苦しむ状況は変わらなかった。アムステルダムのユダヤ人街周辺に集中して住み、言葉遣いや風体が独特で非ユダヤ人と交わることの少ないユダヤ人貧困層の生活は、オランダが近代国家として歩みはじめた19世紀であっても、目に見えて改善されることはなかった。都市改革者サルファーティが取り組んだのは、まさにこのアムステルダムの近代化の問題であり、そのなかで取り残された人々をめぐる問題だったのだ（36-7）。

## 医師として

サムエル・サルファーティは1813年、アムステルダムのポルトガル系ユダヤ人の家に生まれた（37）。

20歳でライデン大学に入学したサルファーティは、学生団体に華やかな学生生活を謳歌することなく、禁欲的に自然科学や医学などの学問にはげむ日々を送る。もともとサルファーティの一家はユダヤ教の正統派に属し、彼もその教えを忠実に受け継いでいたため、飲食を含め厳しい戒律に服していたこともあった。他方、知的な活動には活発に参加し、ライデンの薬学協会に参加して学びを深めている（37）。

26歳でライデン大学を卒業すると、サルファーティはアムステルダムに帰郷し、1840年、ポルトガル系ユダヤ人貧困者向けの病院の医師に就任する（38）。

医師として貧困者治療にあたるなかで、サルファーティは貧しいユダヤ人地区の現状を目の当たりにする。19世紀のアムステルダムの貧困地区は、水道も下水もない劣悪な衛生状態にあり、コレラやチフスなどの伝染病が蔓延し、多くの犠牲者を生んでいたが、なかでもユダヤ人街周辺は市内でもっとも貧しい地区として知られていた（38）。

## 社会事業家として

サルファーティは、医療や公衆衛生のみならず、工業や農業を柱とする産業の発展が人々の福利を増大させ、貧困から脱するすべをあたえることも認識していた。そこでオランダの産業振興協会のアムステルダム支部に加入し、積極的に参加し、各界の人物と交流を深める（40-1）。

1847年、農業・農地開発促進協会が発足し、アムステルダムにおける廃棄物回収と堆肥加工、農村部への販売という一連の活動を開始した。施設利用をめぐる行き違い、近隣住民からの苦情など、さまざまな困難に見舞われながら、サルファーティは仲間たちと走りまわり、なんとか活動を軌道に乗せようと全力を尽くした。その甲斐あって初年度、農業・農地開発促進協会はわずかながらも収益を上げることに成功した。その後も同協会の活動は約30年継続する（42）。

サルファーティが次に取り組んだのは、アムステルダム市民、とくに貧困層の生活水準を改善するため、安価で良質のパンの大量製造・普及を実現することだった（42）。

1857年、ついにアムステルダムのフェイゼル運河通りに、25馬力の蒸気機関で稼働する大規模製パン工場が完成した。最新式のオーブンを備え、労働条件も良好なこの工場では、週あたり実に9万個のパンが製造された。衛生的で質がよく、しかも安価なパンは評判となり、市民の強い支持を得た(43)。

サルファーティの都市改革への貢献は素晴らしいものがある。以上の活動が第1の柱であるが、サルファーティの活動の第2の柱は、アムステルダムの産業振興である(43)。

#### 殖産興業の担い手として

サルファーティの活動の第2の柱は、アムステルダムの産業振興である(43)。

### 第4章 メルウエーデ広場の青春——広場の少女アンネ

#### メルウエーデ広場にて

アムステルダム中央駅から南にしばらく市電に乗ると瀟洒な集合住宅が整然と立ち並ぶ南部地区に入る(56)。

そのなかに、細長い集合住宅に囲まれ、二等辺三角形のかたちをしたメルウエーデ広場がある(56)。

#### 暗転するメルウエーデ広場

1942年6月12日には、アンネ・フランクは13歳の誕生日を迎え、家族や学校の友人たち、近所の仲間たちからお祝いの品を受け取っている。親からのお祝いの1つが日記帳であり、かの『アンネの日記』が書き始められたのがまさにその6月12日だった(70-1)。

その格子縞の日記帳が購入されたのは、広場のそばのブランケフォールト書店だったが、書店主のヘリット・ブランケフォールトは、場所を使わせてほしいという親ナチ派の要求を毅然として断った気骨ある人物で、地域の人々の信頼も厚かった(71；フェルカーフェン2022, 196)

一家は近所の誰にも知らせず、7月6日早朝、忽然と姿を消した。アンネの友人ハンネリ・ホスラリたちが朝、いっしょに登校しようとアンネの家を訪ねたが誰もいなかったため、少女たちは茫然としたという。フランク家の隣人は、「(親族のいる)スイスにでも行ったのではないかと語っていたが、もちろん詳細は不明だった(71)。

#### 「これはお姉ちゃんの靴じゃない？」

メルウエーデ広場地区では、友情は引き裂かれ、住民の多数を占めていたユダヤ人がごっそり姿を消した。かつて子どもたちの歓声が響いていたメルウエーデ広場には、もはや遊ぶ者となぐ、寂莫とした空間が広がるばかりだった(74)。

## 第5章 「涙の館」、オランダ劇場にて

### 悲劇の舞台として

旧ユダヤ人街から南東に向かうと、デ・ブランターージュ地区という瀟洒な建物の立ち並ぶ一帯がある。ここには歴史ある動物園や公園が配置され、文化施設も多く、市内でも高級感の漂う地区といえよう。その地区にルネサンス様式の優美な劇場がある。オランダ劇場という（75）。

オランダ劇場は、単に悲劇を演じる舞台を提供しただけではなかった。オランダ劇場そのものが、悲劇の舞台となったのである（76）。

1942年7月から翌43年11月まで1年あまり、オランダ劇場はアムステルダムはじめオランダのユダヤ人がいったん集められ、東方の強制収容所に移送される拠点となった（76）。

劇場が悲劇の舞台（劇場）となるとは、著者（水島）の見事な喩である。

### 「穏健」な占領政策？

ドイツによる占領がはじまってしばらくのあいだ、オランダでの市民生活は思いのほか、平静を保っているようにみえた。ドイツ軍は一定の規律をもって行動したため、乱暴や略奪が横行したとまではいえない。そもそも占領政策は軍政ではなかった（77）。

「占領政策は軍政ではなかった」ことはわからないでもない。しかしながら、結果としてというか、全体として見れば、その後、盲動的に展開されるナチズムの反ユダヤ主義はどうなるのか、という問題は残ると思われる。おそらく初発の占領政策（軍政）はそうでなかったと考えればよいのかもしれないが、ナチスの占領政策は緩やかに始まったというだけでは物足りないように思われる。

### 激化する迫害

水島によれば、一見穏健と思えるドイツ占領行政のもと、ユダヤ人に対する圧迫、そして迫害は着実に進行したという。すなわち、1940年10月、公務員や教員は全員、「アーリア人」「非アーリア人」の区分にしたがって宣誓書の提出を求められたうえで、翌11月、ユダヤ人の公務員や教員が解雇された。その数は約2000名にのぼったという（78-9）。そして、水島は次のように述べる。

1940年末から1941年はじめにかけて、ユダヤ人やユダヤ系商店などへの暴力が激しさを増す。41年2月、アムステルダムのユダヤ人街で、国民社会主義運動の防衛隊が挑発活動をおこなったが、そのさい乱闘のときの傷がもとで、数日後に防衛隊メンバー1名が死亡する。するとすぐあとに当局は、この地区で20歳から35歳までのユダヤ人男性を400名以上捕え、連れ去った（79）。



## ユダヤ人排除の進展

その間、ユダヤ人たちの社会生活に次々と制限が課され、オランダ社会からの「排除」が進行した、と水島は言う。水島は次のように述べる。

ユダヤ人は公共の場に立ち入ることを許されず、劇場や図書館、美術館、公園、カフェ、レストランなどを利用することもできなくなった。アンネ・フランクはスケートが好きで、スケートの達人でスイス在住の従兄と滑れる日を待ち望んでいたが、それもかなわぬ夢となった。プールの立ち入り禁止について、彼女はスイスの親類に書き送っている。「プールに行くことができないので、日焼けすることは難しそう。残念だけど、仕方ないわ」（80-1；フェルカーフェン 2022,184.）。

## 東方への「移送」

水島によれば、1942年6月、ユダヤ人の「労働力」移送の計画が公表され、7月から開始された。しかし「自発的」とされたこの移送に加わる者はほとんどおらず、アムステルダム南部の集合場所に集まったユダヤ人の数は、当局の想定をはるかに下回っていた。そのため、当局は方針を転換した（82）。事態は以下のように展開して行く

みずから移送に応じるユダヤ人は少数にとどまった。そこで当局はユダヤ人を集めるため、大規模な強制連行を開始する。夜8時以降の時間帯を選び、対象者の住居を襲って連行したのである（83）。

こうしてユダヤ人の強制収容所への移送が大規模に実施され、その多くが死亡した結果、大戦初期に7万人を超えていたアムステルダムのユダヤ人のうち、生き延びて終戦を迎えた人は、わずかに1万人程度だったとみられている（83）。

「大戦初期に7万人を超えていたアムステルダムのユダヤ人」が、「生き延びて終戦を迎えた人は、わずかに1万人程度だった」ことは重要な問題である。

ここに、ナチズムの反ユダヤ主義が明瞭に現出されていると思われる。

## ユダヤ人街の悲劇

当局者による移送と連行により、文字通り一網打尽となった典型的な地区がユダヤ人街であるが、ここは狭い住宅が密集し、その日暮らしの不安定な生活を送る貧しいユダヤ人が多いという特徴があり、アムステルダムで最貧困地区の一つであったのだが、歴史学者のワリィ・デ・ラング Wally de Lang が2017年に刊行した『ワートルロー広場—64番地から78番地に最後に住んでいたユダヤ人たち』は、このユダヤ人街の特定の街区に住んでいた全家族の動向を明らかにした労作である、と水島は言う。

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）

デ・ラングの調査によると、そもそもこの地区の住民の90%がユダヤ人だった。このワーテルロー広場—64番地から78番地に住んでいたユダヤ人は26世帯、合計で114名いたが、そのうち戦後まで生き延び、生還したのはわずか10名だった。他のほとんどは強制収容所で人生を終え、一家が全員死亡した例も多い（84）。

### ユダヤ人協議会

水島によれば、ユダヤ人の大量移送に協力したのが、ドイツ当局の指示により設立されて、有力ユダヤ人たちによって組織された「ユダヤ人協議会」であった。彼らには、ドイツ当局に協力の姿勢を示すことで一定の譲歩を勝ち取れるのではないかという淡い期待があった。「その意味でユダヤ人協議会は、『ユダヤ人の大量移送を正当化』し、コミュニティ内部から移送を支えたといえる」（85）と、水島はきびしく指摘する。

水島は次のように言う。すなわち、オランダ全体として見れば、非ユダヤ人のオランダ人の圧倒的多数は、ユダヤ人排除の進行にほとんど関心をもたなかった。占領下のオランダ人に反独感情が高まり、レジスタンス運動が各地で活発な広がりをみせたのは、1943年、ドイツの戦況が悪化するなかで一般のオランダ人男性にも徴用の網がかかり、強制労働におくられるようになってからのことである。「しかしそのころにはすでに、オランダのユダヤ人のほとんどが、オランダ劇場などを通じて収容所に移送されていた」（86）。オランダのユダヤ人のほとんどが収容所に移さていたとはなんとという悲劇であろうか。慨嘆せざるを得ない。

### オランダ劇場——「心の避難所」

「1941年から42年にかけてユダヤ人の公共の場への立ち入りが禁じられたが、彼らは精いっぱいに対応を試みた。家庭内の活動はその1つである」（86）、と水島は言う。そして次のように続ける。

たとえばアンネ・フランクの親友、サンネ・レーダーマンの両親は、バイオリンとピアノを演奏できたことから、フランク家の近くの自宅で室内コンサートを開いていた。アンネの父母や姉マルゴーはこのコンサートに観客として参加し、モーツァルト、メンデルスゾーン、ベートーベンのメロディに耳を傾けている。ただ、アンネ自身は映画が大好きだったので、「おうち映画館」のほうがお気に入りだった。アンネは、ユダヤ人中学校知り合った新しい友達、ジャクリヌス・ファン・マールセンといっしょに、自宅で昼の映画鑑賞会を開いていた（86-7；フェルカーフェン、200）。

### 「ユダヤ人の上演であったとしても」

水島によれば、オランダ劇場の幕切れはあっけなくやってきた。1942年7月、オラン

ダ劇場はユダヤ人の収容所への移送拠点となるべく、占領当局によって強制的に接收され、劇場としての機能を停止した。同年7月、オランダ人の移送が本格的に開始される。アンネ・フランクの姉、マルゴーが移送のために呼び出しをうけ、一家全員がただちに潜伏生活に入ったのもこの7月である。7月19日の午後、いつものように上演中、「ユダヤ人国外移住中央本部」の指導者、フェルディナント・フーゴー・アウス・デア・フンテンらがオランダ劇場に乗り込んできた。アウス・デア・フンテンらが踏み込んだとき、昼の公演の最中だったことから、彼は口に指をあてて配下の者に静かにするように指示したことをヘルベルト・ネルソンは記憶している(90-1:フェルカーフェン, 206)。

## 第6章 保育士たちのレジスタンス

水島によれば、オランダ劇場がユダヤ人移送の拠点としてもちいられていたころ、通りを挟んで目と鼻の先に保育園があった。この時期その保育園は、オランダ劇場に滞在するユダヤ人家族の子供たちを預かる業務を託されていた。この一見地味な保育園こそが、オランダにおけるレジスタンスのなかで有数の拠点だった(92)。

### オランダ劇場とユダヤ人協議会

「移送拠点に早変わりする1942年7月まで、オランダ劇場ではさまざまなユダヤ人の演劇人や音楽家が、日々上演活動をおこなっていた。しかし劇場が機能を停止したため、ユダヤ人アーティストたちも移送されるのは時間の問題だった」(94)と、水島は述べた後、次のように述べる。

ユダヤ人協議会の有力メンバーとしてオランダ劇場で現場の指揮を執ったのがヴァルターズ・ズュースキント Walter Suskind だった。ズュースキントは1906年生まれ、ドイツ出身のユダヤ人だったが、祖父がオランダ人だったことからオランダ国籍を取得しており、オランダ系の多国籍企業、ユニリーバ系企業で出世を果たすなど、オランダと縁が深かった(95)。

### 新人保育士ベティ

「オランダ劇場の講堂にユダヤ人があふれ、騒音と悪臭、子どもの泣き声などで劣悪な状況におかれるなか、ズュースキントは、子どもたちを向かいの保育園に一時的に預けてはどうか、と提案した。この提案にドイツ当局も全面的に賛成し、数日のうちに、保育園は移送を待つ子どもたちの待機所に早変わりした。結果としてこのことが、保育園という脱出ルートを新たに拓き、多くの命を救うことになる」(96)と、水島は述べた後、次のように述べる。

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）

この保育園に実習生として通っていたのが、まだ20歳にもならないベティ・アウトケルク Betty Oudkerk である。ベティは、のちに子どもたちの脱出劇で中心的な役割を果たしたユダヤ人女性で、戦後に生き残って貴重な証言を残している（96）。

1941年、17歳のベティは実習生の保育士となり、保育園で学びつつ子どもたちを世話する日々が始まった。しかし翌年、保育園が移送されるユダヤ人の子どもの預かり施設に転じたことで、保育士たちの職場環境は激変した。滞在する子供の数は激増し、100名を超えることもめずらしくなかった。ベティは他の数名の保育士とともに、オランダ劇場で子どもを預かって保育園に連れていき、相手をする毎日を送ることになる（97）。

ユダヤ人協議会の職員同様、保育園のユダヤ人保育士たちもとりあえず移送を免除された。移送を待つ子どもたちの面倒をみたことで、当局のユダヤ人移送に協力する

ユダヤ人職員として扱われたからだ。ただ保育士の場合、その免除は本人に限定され、家族はそうならなかった。ベティの母親やきょうだいは強制的に連行され、移送された（98-9）。

### 救出作戦の開始

水島によれば、「この保育園は、移送拠点としてのオランダ劇場とくらべれば、ドイツ当局の監視の目は緩かった。ここに目をつけたのがユダヤ人協議会のズースキントである。この保育園を経由すれば、監視の目をうまくぐり抜け、子どもたちを脱出させるのではないか。そこで彼は、ユダヤ人協議会の仲間のフェリックス・ハルフェルスタット、保育園のピメンテル園長、レジスタンスのメンバーらと相談を重ね、綿密な準備をしたうえで、子どもたちの大脱走という企てに乗り出した。密儀では具体的な救出計画が相談された。準備から脱出、移動、潜伏にいたるスキームをすべて確認したうえで救出作戦にゴーサインが出された」（99-100）。

### 「ハンナちゃんを、ちょっと預けてみるおつもりはありませんか」

水島は次のように述べる。「1943年1月以降、保育園からは連日のように子どもたちが脱出をはたしていく。保育士のうち、救出作戦の詳細を熟知し実際に携わったのは、ごく一部に限られていた。幼児たちは、保育園から買い物かごやリュックサックに入れて運ばれ、大きな子どもは散歩中に『行方不明』になり、少しずつ姿を消していった。引き渡しの絶好の場所となったのは、通りの端の角に面した歩道だった。こうして引き渡された子どもたちは、まずは近くのユダヤ人関係の倉庫や施設に隠される。そして「ダビデの星」のついていない服に着替え、偽名を与えられ、偽造書類を手にして、レジスタンス・メンバーとともに、遠方へと逃避行をはじめた」（100-2）。

### レジスタンス組織の協力

水島によれば、「1943年の春からは、心強い味方が加わった。プロテスタントの指導者、ヘジーナ・ファン・デル・モレン率いるキリスト教系のネットワークである」(103)。「ヘジーナ・ファン・デル・モレンは、表向きはプロテスタント有力者として全国試験官などを務めつつ、実はプロテスタント系の有力レジスタンス組織、『信実』グループの中核メンバーだったのである」(104)。「オランダにおけるレジスタンスの数少ない女性指導者として彼女の存在は歴史に刻まれている」(104)としたうえで、水島は、次のように述べる。

ヘジーナ・ファン・デル・モレンは、保育園の子どもたちの救出作戦をただちに開始した。数日のうちに、彼女はさっそく12人の子どもを連れ出している。そして彼女の仲介により、これ以降、「信実」系のレジスタンス・グループが保育園の子どもたちの救出に携わるようになる(104-5)。

### 「演技する」ということ

水島は次のように述べる。「しかしながら、保育園に滞在した子どもたちの9割近くが、なすすべもなく家族とともに移送され、そのほとんどが絶滅収容所で死を迎えたことも事実だった」(106)。「言い換えれば、少数の子どもたちを救うために、多数の子どもたちを犠牲にした、ということでもあった」(106)。「それではどうすればよかったのか、悔恨をもって当時を振り返る関係者は多い」(106)。

関係者のひとり、ベティ・アウトケルクは潜伏し、戦後に生き延びることができたものの、「自分をもっと多くのことができたのではないか」、「自分をもっと多くのリスクを引き受けていくことができたのではないかと語っている。彼女は2020年に天寿を全うするまで、しばしばホロコースト関連の行事に出席し、また当時の様子を語り伝えてきた(106-7)。

ベティの最晩年のころ、彼女を主人公とした歴史小説を書こうと考え、彼女のところを訪れた作家がいた。エレ・ファン・レインという、俳優としても知られている女性である。ファン・レインが俳優を本業としていることを知り、ベティはこう語ったという。私が子どもたちを救うためにしたことは、あなたがしたことと同じだった。それはね、「演じる」ことだったのよ、と(107)。

## 第7章 学生たちのレジスタンス——大時計の下で

### 中央駅の大時計

水島によれば、アムステルダムの中央駅、大時計の下で白昼堂々と子供を受け渡すと

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）という危険な行動は、その大胆さのゆえにか、かえって怪しまれることが少なく、結果として多くの子供が脱出に成功した。そしてその旅を命がけで遂行したのが、まだ若い大学生たちだった（109）。

### 救出作戦をめぐるレジスタンス・ネットワーク

保育園での子どもたちの救出作戦に関わったレジスタンス組織としては、地下新聞『信実』系のグループのほか、主に3つの団体があった。NV、アムステルダム学生グループ、ユトレヒト児童委員会である（110）。

### アムステルダム学生グループ

アムステルダムでは、1942年夏より、学生によるユダヤ人の子どもたちの救出活動がはじまる。その軸となった団体が、アムステルダム学生グループである。彼らは移送を控えたユダヤ人の家庭を訪れて子どもを預かり、アムステルダム中央駅や市内のアムステルダム駅で他のメンバーに子どもを引き渡し、潜伏場所に送った。これらのレジスタンス活動では、しばしば駅の大時計の下が待ち合わせ場所としてもちいられた（111）。

### 聖職者たちのレジスタンス

学生たちが無事子どもを届けたあとは、現地の人々がバトンを受け継ぎ、潜伏生活を支えていった。オランダの小都市スネークで現地協力者の中核となったのは、キリスト教の聖職者たちである。しかもプロテスタント、カトリック双方が積極的に協力した。信徒コミュニティを率い、地域社会で信頼を得ていた彼らが、現地のコーディネーターを買って出たことの意味は大きい（113）。

「当時のオランダ社会では、異なる宗派のあいだに深い溝があり、とくにカトリックとプロテスタントは相対立する関係にあったが、スネークで両派が緊密に協力して救出活動に携わりエキュメニズム（教会一致）を先取りする関係を築いていたことは、興味ぶかい」（113-4）と水島は言う。いかにも水島らしい観察である。

評者（土倉）なりにコメントすれば、相対立する関係にあったカトリックとプロテスタントが、この期にナチズムの反ユダヤ主義に対抗して、緊密に協力したことが重要であると思われる。

### 夢見る瞳——「家なき子」レミ

水島によれば、「例の保育園の誰もが愛し、『寵児』となった男の子がいた。名はレミ。保育園の救出作戦を扱った文献のほとんどについての記述があり、写真も多く残されている」（115）という。レミは小都市ブルーメンダールの街角で発見された。当局は、こ

の赤ん坊に「ユダヤの特徴」があるとしてユダヤ人と判定したため、赤ん坊はアムステルダムの保育園に送られ、移送を待つことになった。

さて、レミについて次のように記すところが、水島の真骨頂である（116）。

赤ん坊には、レミという名前が付けられた。エクトール・マロの名作、『家なき子』の主人公レミにちなんだ名前である。周知のように『家なき子』は、肉親と離れ離れになり、旅芸人の一座に入るなどして各地をめぐったレミが、最後に母親と再会を果たす物語だが、この「レミ」という命名にも、赤ん坊がふたたび親と出会うことを願う思いがこもっているようだ（116-7）。

では、レミとはいったい何者だったのか。水島によれば、それから半世紀が過ぎた2002年、レミの出自がはじめて明らかになり、彼を覚えている人びとすべてを驚かせた。実はレミの実兄エディ・ヘザングは弟の行方を追ひ、長年にわたって調査を進めていた。そしてついにその執念が実り、自分の実弟が、レミという名で知られる保育園の寵児と同一人物であることを突きとめたのである（118）。

そして、水島は次のようにこのエピソードを終えるところが感動的である。

「エディはこれ以降、レミのことを知る元保育士らと対面し、弟のその後の様子などを聞くことができた。弟が保育園の寵児だったことも初耳だった。写真によって、弟の保育園時代の姿も知ることができた」（120）。

『『家なき子』のレミが最後に母親と再会を果たしたのに対し、オランダのレミは、肉親と再会することはかなわなかった」（120）。

### 保育園最後の日々

水島によれば、1943年7月23日、突如ドイツ兵たちが保育園になだれ込んだ。彼らはその場にいた子どもたち、ピメンテル園長、保育士、実習生たちを連行した。数名の保育士は屋根裏部屋に隠れ、連行を逃れた。この日、アムステルダムで大規模なユダヤ人の連行が実施されたのである（120）。その後は次のようになって行く。

1943年秋には、アムステルダムに住むユダヤ人の移送は峠を越えた。すでにユダヤ人のほとんどが移送されるか、潜伏していたからである（121）。

9月下旬、アウス・デア・ヒュンテン Aus der Funten の命により、保育園が数日以内に閉鎖されることが決定した（122）。

保育園が閉鎖されたあともしばらく、オランダ劇場は移送拠点としてもちいられた。もはや移送すべきユダヤ人がほとんどいなくなり、正式にオランダ劇場が閉鎖されたのは、1943年11月19日である（123）。

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）

### 子どもたちと大人たち

さて、水島は、「アンネ・フランク一家の「隠れ家」生活が、オランダにおけるユダヤ人の潜伏生活の代表格のように語られる」（125）と述べた後、次のように指摘することは重要である。

しかし実は、4人の親子がそろって1つの隠れ家で2年以上住むことができたのは、きわめて例外的だった。多くのユダヤ人は、たとえ親が潜伏できても家族が離れ離れになり、少人数で淋しい潜伏生活を送らざるをえなかった。そして潜伏場所を転々としたユダヤ人も多かった。子どもの場合、潜伏した場所の数は、平均して4・5カ所に達したという（125）。

ここに、オランダにおける多くのユダヤ人の受難がある。ヨーロッパ現代政治史の大きな問題である。

### 子どもたちと大人たちユダヤ人登録と

水島は第7章を次のように締めくくる。「アムステルダムはこのように、子どもたちと大人たちが潜む、多様な『隠れ家』が点在する町だったのである」（126）。きわめて秀逸な結語だと思われる。

## 第8章 カルマイヤーのリスト——法律家たちのレジスタンス

水島によれば、アムステルダムで、アンネ・フランク一家と親交のあったハンネローレ・クラインとその家族は、ユダヤ人として強制収容所に送られる運命にあったものの、最終的にそれを免れ、大戦を生き延びることができた（127）。

水島は次のように述べる。

1942年7月、クライン家とフランク家に同時に、「ドイツにおける労働」への呼び出しが届いた。しかし両家の明暗を最終的に分けたのは、ハンス・カルマイヤー Hans Calmeyer（1903-1972）の存在だった（127）。

### ユダヤ人登録とカルマイヤーの着任

水島によれば、カルマイヤーは1903年、ドイツ・オスナブリュックの名門の家柄に生まれた。大学で法学を専攻し、弁護士として仕事を開始したが、元来正義感の強い彼は、ナチ支配への懸念をいだき、共産党員の弁護人を引き受けていた。弁護活動が「反ナチ的」とみなされ、法廷活動の停止処分を受けるなどした（129-30）。水島は次のように続ける。



その後軍役に転じた彼は、ドイツによるオランダ占領後、オランダに派遣された。当地でたまに、占領行政の要職にあったオスナブリュック以来の友人の法律家と再会する。そして彼の誘いを受け、ハーグで判定部の責任者に任じられたのである(130)。

1941年3月、カルマイヤーは判定部長として任務を開始し、ユダヤ人認定の再審査請求を扱う業務に専念した(130)。

さて、ここからが、本書において重要な箇所である。水島は次のように論証する。「結果としてみれば、彼はその権限を積極的に活用し、再審査請求に広く門戸を開き、提出された証拠書類を入念に検討したうえで、多数の『完全ユダヤ人』認定の取り消しに成功し、該当者たちの収容所送りを防ぐことができた。再審査請求への対応を詳細に検討した現代史研究者のペトラ・ファン・デン・ボーム・ハールトは、判定部に請求を行った人々の実に73%が、カルマイヤーの対応の結果、大戦を生き延びることができたと算出している」(130-1)。「カルマイヤーのリスト」について、水島は次のように述べる。

カルマイヤーが再審査請求を受理し、請求者について広くユダヤ人認定を再検討する方針であることが知られると、該当する「ユダヤ人」からの再審査請求が判定部に殺到した。この再審査にかかっている限り、原則的に「東方における労働」のために移送されることはない。再審査中のユダヤ人のリストは「カルマイヤーのリスト」と呼ばれ、移送の呼び出しにおびえるユダヤ人の頼みの綱となった(131)。

#### クライン一家——「真実の上に作られた虚偽」

水島によれば、ハンネローレ・クライン一家はフランクフルトの出身で、父は同地でリベラル派のユダヤ教信徒としてアンネ・フランクの父、オットーと親しい関係にあった。一家は1935年、フランク一家のあとを追うようにアムステルダムに移住する。両家は家族ぐるみの付き合いをし、ハンネローレ姉妹とアンネ、姉マルギーは文字通り、「広場の仲間たち」だった(133)。

クライン家はどのような根拠をもちい、ユダヤ人認定の取り消しを求めたのか。クライン家は次のように主張を展開した。すなわち、ハンネローレの母、マリアヌの法律上の父(故人)はユダヤ人だが、実は生物学上の父は、ドレスデンのプロテスタント家庭の養父(故人)であり、それゆえ「アーリア人」である。クライン家はこのことを根拠づけるため、ありとあらゆる材料を取り揃え、再審査請求を提出した(133-5)。まさに、「若干の真実の上に作られた虚偽」(135)だったのだ、と水島は言う。

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みずす書房、2023年）

### 占領当局の中枢にあって

「ユダヤ人迫害の本拠たる占領当局のまさに中枢で、なぜカルマイヤーによる大胆な活動が可能だったのか。しかもそれが最後まで露見せずに継続し、敗戦までカルマイヤーがその地位にとどまり続けたことは驚きに値する」（136）と、水島は言う。3つの理由が以下のように述べられる。

理由の第1は、カルマイヤーがユダヤ人認定の取り消しや区分変更を判定するにあたり、法律家らしく厳格な判定基準を設定したうえで、それを個別の事案に適用する方式をとったことである（136）。

第2の理由は、カルマイヤーがユダヤ人本人や支援する弁護士らと私的に接触することを避け、疑念を招きかねない行動を極力控えたことである（137）。

第3の理由は、担当部署の要職が、カルマイヤーの信頼できる人物たちによって固められていたことである（137）。

### 「フェンマの謎」

水島によれば、終戦後、カルマイヤーは占領当局の要職にあった者として嫌疑に掛けられ、1年以上収監された。しかし関係者の尽力もあり、無事釈放される。彼はドイツに帰国し、弁護士として活動を再開した（139）。他方、カルマイヤーへの疑念も強く存在する。とくに1943年以降、カルマイヤーの判定にばらつきが生じ、従来なら受け入れてきたケースを拒否する例が増えたことは批判的となった（139）。カルマイヤーはみずからの判断にもとづき、多くのユダヤ人をガス室におくったという厳しい見方もある（140）。それを裏付けるものとして、水島は次のように述べている。

2020年5月、オランダ解放から75周年の記念日にちなむ特集で、「フェンマの謎——救い主によって犠牲にされて」という番組が、有力テレビEOで放送された。この番組は、フェンマというユダヤ人少女の運命を追い、まさにカルマイヤーの影の部分に光を当てた追真のドキュメンタリーだった。なおこの番組に合わせ同名の書籍も出版されている（140）。

### 悩める法律家として

水島によれば、フェンマに関する審査は、厳密な手続きを経ているようにみえて、しかしその最終判定はカルマイヤーの裁量に委ねられていた。その意味でフェンマは、「救い主」カルマイヤーにより犠牲にされた1人でもあった（142）。カルマイヤーはのちに、みずからを「人殺し同然」と考えていた、述懐しているが、彼は自分の判定のもたらす重大な結果を熟知したうえで、請求を却下していたといえる。彼を一方的に英雄視する扱いはバランスを欠いている、という主張には根拠がある（142-3）。

「フェンマは、犠牲にされた1人」という角度から見れば、カルマイヤーを「一方的に英雄視」はできないであろう。しかしながら、水島は次のように述べることによって、寛容にバランスを取っていると言えると思われる。

他方で、1943年以降、当局内でカルマイヤーの審査態勢に対する疑念が高まるなか、カルマイヤーはぎりぎりのところで奮闘した、という見方もある。そしてその状況下、もし彼が職を辞したとしたら、後任は確実にユダヤ人に厳しい人物が占めたであろうし、それは弁護士たちとの「暗黙の協力関係」を維持してきたそれまでの審査態勢を完全に覆したであろう(143)。彼は英雄というよりも、自分の権限のおよぶ範囲でユダヤ人を救いつつ、あくまで慎重に業務を進めようとする、悩めるひとりの法律家だった(143)。

さて、第8章を水島は次のように締めくくる。

「なお日本からみていると、カルマイヤーの評価をめぐる分断が存在するとはいえ、今もなお当事者が健在であり、往時を詳細に語り、研究が進展し、ジャーナリストが積極的に取り上げているそのことに、驚きを禁じ得ない」(144)。

「それぞれ立場は異なっている、ユダヤ人迫害の諸相をめぐる記憶の継承と研究、報道が現在も進行していること自体に、大きな意義があるといえよう。ジャーナリスト、研究者、編集者、それぞれが専門家としての役割を自覚し、過去と正面から向き合うことの重要性については、日本でも大いに学ぶことがあるのではないか」(144)。

ここで、「2. 本書の梗概」の領域を超えた、常識はずれのコメントを許していただきたいのだが、水島の「8章結語」は、水島のこの著書全体の決意表明のような気がして胸を打たれる。「それぞれが専門家としての役割を自覚し、過去と正面から向き合うこと記憶の継承と研究、報道」はとくに研究者が留意しなければならない問題ではないかと呼びかけているように思われてならないのである。

## 第9章 オードリー・ヘプバーンとアンネ・フランク——魂の邂逅

### 「ユダヤ人の一掃された都市」

水島はこう述べる。「ドイツ当局により、アムステルダムで最後のユダヤ人の大規模な一斉検挙がおこなわれたのは1943年9月末だった。ユダヤ人協議会は、ついに幹部職員まで検挙された」(145)。「当局はアムステルダムを『ユダヤ人の一掃された都市』と公式に宣言した」(145)。

しかしながら、「ユダヤ人の一掃された都市」のなかで、なお万単位ユダヤ人が生活し続けたことが重要である。どんな人たちがそうなのか。水島は次のように言う。

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）

ユダヤ人認定の取り消しを求める「カルマイヤーのリスト」に掲載された人びと、非ユダヤ人と結婚した人、「完全ユダヤ人」と認定されなかった人たちは、厳しい制限をうけつつ、とりあえず生き延びていた。それに加え、偽の身分証明書を確認した人、そしてアンネ・フランクの一家のように潜伏生活に入った人もいた。レジスタンス活動にみずから従事する人も少数ながらいた。彼らはいずれも、戦争がおわり、ユダヤ人が解放される日を待ち望んでいた（145-6）。

「しかし、解放への歩みは遅々として進まなかった」（146）と、水島は言う。フランスやベルギーの多くの地域は1944年秋に解放されたものの、オランダで国土の大部分が解放されたのは、ドイツが降伏した1944年5月だった。その間、潜伏したユダヤ人を摘発するユダヤ人狩りが散発的につづき、厳しい食糧事情と相まって、オランダのユダヤ人犠牲者をいっそう増す結果になった（146）。

しかも「マーケット・ガーデン」作戦以降、アムステルダムはじめオランダ西部への鉄道運行が停止したことで、食料や燃料の輸送は極端に滞った。この年の冬の厳しい寒さと合わせ、アムステルダム市民の生活事情は大幅に悪化し、多数の戦死者が出た（147）。

## 2つの広場——ワートルロー広場とメルウェーデ広場

水島はワートルロー広場とメルウェーデ広場を比較しながら次のように記している。

アムステルダム中心部のユダヤ人街は、ほとんどの住民が連行されるか潜伏したことで、もぬけの殻になっていた。かつて、その中心のワートルロー広場はユダヤ人商人や買い物客でにぎわっていた。広場を核としたユダヤ人のコミュニティが、確かに存在したのである。住民の多くはユダヤ人の貧困層だった。アンネ・フランクたちが住んでいた、市南東部のメルウェーデ広場周辺のユダヤ人には国内外の中産階級出身者が多く、その多様なネットワークを使って生き延びた人々が一定程度いたのに対し、このワートルロー広場周辺の貧しいユダヤ人は、そのほとんどがなすすべもなく当局に検挙されて移送され、収容所などで死を迎えている（147-8）。

アンネたちが住んでいたメルウェーデ広場周辺の住宅は、オランダ人の不動産業者の管理のもと、ユダヤ人住民の多くが去ったあとも、空き室を抱えながら、とりあえず住宅そのものは損壊されずに維持された（149-50）。

## アーティストたちのレジスタンス

「メルウェーデ広場のいくつかの住宅では、非合法活動、レジスタンス活動が細々と継続していた」（150）と水島は述べて、次のように続ける。

オランダ劇場を舞台に公演活動を展開したユダヤ人アーティストのなかには、アムステルダムに残り、メルウェーデ広場に住み続けた者がいた。ドイツ出身のヘルベルト・ネルソンは、オランダ劇場で父ドルフ・ネルソンとともにユダヤ人の公演活動の中核となった人物だったが、母

が非ユダヤ人であることを立証し、「完全ユダヤ人」認定から外れることに成功した(150)。

ユダヤ人のレジスタンスの執拗さが感じられるわけだが、現地オランダ人の好意的な支えもあったことがうかがえるエピソードだと思われる。

### オードリー、華麗なる一族

水島によれば、ヘルデルラント州アーネム近郊で、「マーケット・ガーデン作戦」の激しい戦闘の様子を身をもって体験した住民のなかに、或る15歳の少女がいた。若き日のオードリー・ヘプバーンだった。オランダ人のオードリーの母エッラはイギリス系の男性、ジョゼフと恋に落ち、結婚した2人のあいだに1929年に生まれたのがオードリーだった。しかし父は家族を置いて家を出てしまい、最終的に両親は離婚する。オードリーは、1939年、母や母方の親戚が住むオランダのアーネムに移り住んだ。母の姉は、オランダの名家、ファン・リンブルフ・スティルムを伯爵家のオットーと結婚していたが、ドイツ当局は、1942年8月、レジスタンス活動の報復措置として、レジスタンスと無関係のオットーを処刑した。オードリーにとって、実父が不在であるなか、自分を親しくかわいがってくれた伯父のオットーは父親同然の存在だった(153-4)。

### レジスタンスの末端にて

水島によれば、アーネム近郊のフェルプという町を舞台に、レジスタンス活動に中心に関わったヘンドリック・フィセル・ト・ホーフトという医師がいた。地方社会の名士であり、名家同士のつながりでオードリー1家も、彼と親しく交わるようになった。実は占領下、フェルプの病院では、医師たちが病院ぐるみで密かにレジスタンス活動に従事していた。病院はさながら地域のレジスタンスのセンターだった。フェルプの町だけで数百名ものユダヤ人が潜伏したとされるが、これもフィセル・ト・ホーフトはじめレジスタンスに情熱的に関わった医師たち、そして病院という場の存在が大きかった(155-6)。

フィセル・ホーフトは、才気煥発で英語も話せるオードリーに目をつけ、各種の業務の補佐を依頼した。基本的には医療関係の補助業務であり、「表」の仕事ではあったが、「なかにはレジスタンスと関わりのある仕事もあったようだ」(156)と水島は言う。そして、次のように締めくくる。

フィセル・ト・ホーフトの補佐とともに、オードリーは特技のパレエを活かして非合法公演に参加し、ダンスを披露した。この非合法公演は当初、ドイツ当局に迎合せずに職を失ったアー

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）

テイストの支援を目的にしていたが、次第に地元やオランダ各地に隠れ住む、ユダヤ人や非ユダヤ人の潜伏者を支援するために開催されるようになった（156-7）。

以上を踏まえると、オードリーを「レジスタンスの少女」として美化はできないものの、オードリーは、フィセル・ト・ホーフトというレジスタンスの中核的人物の素性を知ったうえで、その負担の軽減に協力した面もある。その意味で、彼女がレジスタンスの末端に連なっていたとはいえるだろう（157）。

さて、第2次世界大戦が終了し、オードリーは世界的な映画スターとして登場することになる。水島は次のように描写する。

1945年秋、オードリーは母とアムステルダムに移り住み、本格的なバレエのレッスンに励む。そして1948年、ロンドンに渡り、マリー・ランバート・ダンス学校でバレエをつづけるとともに、舞台や映画に出演する。またよく知られているように、その後舞台劇『ジジ』で注目を浴び、『ローマの休日』で爆発的な人気を博したことで、一躍世界的スターへの道を歩んでいく（157）。

書評者（土倉）が映画『ローマの休日』を観たのは学生時代のことであったが、まさか、オードリーが、戦争とナチスの「反ユダヤ主義」の災厄のなかで、青春時代を過ごしたとは全然知らなかった。

### 移送されるアンネと仲間たち

水島はいよいよ本題に入る。

「ところで『マーケット・ガーデン』作戦が大規模に実施された1944年9月下旬の少し前、9月はじめにオランダからアウシュヴィッツに移送されたユダヤ人のなかに、オードリー・ヘプバーンと同年の、15歳の少女がいた。アンネ・フランクである（158）。水島は次のように続ける。

アンネは1929年6月12日生まれ、オードリーは5月4日生まれ、2人の誕生日はひと月しか離れていない。しかし、アンネはアウシュヴィッツ強制収容所、のちにベルゲン＝ベルゼン強制収容所に送られ、そこで死を迎えた。多感な思春期をおなじように占領下オランダで送り、戦争に翻弄された2人の15歳の少女の運命は、この9月、決定的な分岐を迎える（158）。

アムステルダムのプリンセン運河沿いの隠れ家に潜伏したフランク一家を含む8名のユダヤ人は、1944年8月8日朝、ドイツ当局に踏み込まれ、摘発された（158）。

### ウェステルボルク通過収容所にて

水島は次のように述べる。「ウェステルボルク通過収容所はもともと戦間期、ドイツから流入するユダヤ人難民を収容するためにオランダ政府が活用した施設だった。しか

し1942年7月、ドイツ占領当局に接收され、以後東方の強制収容所にユダヤ人を送るための通過収容所として積極的にもちいられた」(160)。

アンネたち8人は、嚴重に管理されたウェステルボルク通過収容所の「懲罰バラック」に配置された。ここの収容者には重い制約が課され重労働が課された。

しかし、ウェステルボルクの日々は、ひと月も経たないうちにおわりを告げた。続けて水島は次のように記す。

1944年9月3日、「隠れ家の元潜伏者8名を含む1019名の人々が、アウシュヴィッツに向けて鉄道で移送されたのである。実はオランダからアウシュヴィッツへの移送は、この便が最後になった。そのわずか2週間後、「マーケット・ガーデン」作戦がはじまる。そもそも9月3日の移送列車の出発自体、連合軍のオランダ侵攻近しという見通しのもと、急いで運行計画が作られたとみられている。「隠れ家」の仲間たちはこうしてオランダを離れ、ドイツ領内に送られた(161)。

ここで、初歩的な感想になるかもしれないが、コメントするとすれば、連合軍のオランダ侵攻が近いからといって、「隠れ家」のユダヤ人たちをどうしてドイツに移送するのか、という問題である。ユダヤ人たちの生命を大切にしたいというのならわかる。まったく反対に「死に追いやる」ことを急いだのである。ここから抽象的な情念の問題として、なぜ「ユダヤ人憎悪」がナチズムに強いのか、気になるところである。

### 「魂の姉妹」として

「オードリー・ヘプバーンとアンネ・フランク。この世界的に有名な2人の女性は、ともに1929年生まれ、いずれもオランダの隣国(ベルギーとドイツ)に生まれ、のちに家族とともにオランダに移住して学校に通い、オランダで戦争やドイツ占領下の圧政を身をもって体験したという多くの共通点がある。多感な思春期を占領下で迎え、身内がドイツ当局によって迫害され、悩みながら懸命に生き抜こうとした2人の人生は、ついにたがいに顔を合わせる機会はいなかったものの、どこか響き合うものがある」(161-2)と水島は言う。政治学者というよりどこか文学者的な感がしないでもないが、興味深い重要な視点だと思われる。

オードリーとアンネの因縁は戦後も続く。水島は次のように述べる。

2人の足跡は、戦後、思わぬかたちで交錯している。オードリーは戦争直後、アムステルダムにしばらく間借りしてバレエを習っていたが、そのすぐ近くに住んでいたのが、『アンネの日記』の刊行を進めていた出版社の女性編集者だった。彼女はオードリーの戦時中の体験を聞いていた

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）

こともあり、1946年、まだ刊行前の『アンネの日記』（オランダ語タイトルは「隠れ家」）の原稿を、「あなた興味あるかしら？」とオードリーに読ませてくれた（161-2）。

水島によれば、オードリーは、晩年、華やかなハリウッドスターの世界から距離をおき、ユニセフの親善大使として精力的に活動したことは有名だが、彼女はチャリティ活動で表舞台に立つさい、『アンネの日記』の一節を朗読し、世界の子どもたちへの支援を訴える方法をとった。オードリーが好んで朗読した一節は、アンネが屋根裏部屋からアムステルダムの青い空を見上げ、希望を語る場面である。「これが存在しているうちは、そしてわたしが生きてこれを見られるうちは——この日光、この晴れた空、これがあるうちは、けっして不幸にはならないわ」（163）。

## 第10章 隠れ家、その後——アンネと仲間たちの「命のバトン」

### 8名のそれから

1944年9月、アンネ・フランクら隠れ家の8名は、アウシュヴィッツ強制収容所に鉄道で移送された。その後の8名はどのような道をたどったのか（165）。

水島は次のように記している。

2020年、この8名のユダヤ人の摘発後の足取りを追った『隠れ家のあとで』という研究書が刊行された。著者はアンネ・フランク財団に勤務する歴史学者、バス・フォン・ベンダ＝ベッグマン。史資料を駆使して彼らの収容所生活の展開に迫る同書は、アンネ・フランク以外のユダヤ人のたどった運命を詳細に明らかにしただけでなく、アンネ・フランクについても、その死期——今にいたるまで確定されていない——について独自の検討をしており、貴重な研究といえよう（165-6）。

コメントすれば、「アンネ・フランク財団」については、評者（土倉）は不覚にも知らなかった。このような財団が進める政治文化の研究と発信の充実は、オランダ政府と国民の誇りとなるものであろう。ユダヤ人の収容所生活の実態はいかなるものであったのか、その問題性は何であるか等、その研究は現代の歴史研究において重要なものであるに違いない。

### 【選別】

水島によれば、アンネらを乗せた列車は1944年9月3日の朝、アウシュヴィッツに向けて出発した。移送された人数は1019名。人々は家畜車に1両あたり70名程度が押し込められ、車内環境は劣悪だった。大半のユダヤ人はなすすべもなく車内で悲痛な時間を



過ごし、9月5日の晩、アウシュヴィッツに到着した。ある女性は、この列車でアウシュヴィッツに着いたときのことを「ついに地獄に来てしまったと思った」と述懐している(166-7)。水島はさらに次のように続ける。

到着したユダヤ人たちを待っていたのが「選別」である。列車から降りた人々は、ただちに医師たちの検分をうけ、短時間で「右」と「左」の2つのグループに分けられた。「左」に行けと命令された人々はただちにガス室に送られ、殺害された。その数は300名を超える(167)。

元潜伏者8名のうち、この選別によってただちにガス室に送られる危険性があったのは、オットー・フランク、フリッツ・ブフェファー、そしてアンネの3名だった(167)。

この3名はいずれも選別をくぐり抜ける。その結果、元潜伏者8名は全員、ただちにガス室に送られることはなく、収容所に入ることになった(168)。

### アンネ姉妹と母エーディトの別れ

水島によれば、アンネたち女性4名は、男性の収容された場所から少し離れた場所から少し離れたアウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所に送られた。彼女たちは毎日、屋外で石を運ぶなどの重労働を強いられ、早朝や深夜におよぶ点呼に集められた。夜は建物のなかにぎゅうぎゅうに詰め込まれ、食事は不十分だった。監視員による暴力がはびこっていた(170)。水島は次のように続ける。

1944年10月30日、アンネ姉妹と母エーディトは、決定的に引き離された。アンネ、マルギー姉妹を含む1000名以上の女性を選び出され、アウシュヴィッツ＝ビルケナウからベルゲン＝ベルゼン強制収容所に列車で送られたのである。この日の点呼で、病人や高齢者と、労働可能とみなされた者が区別され、後者がベルゲン＝ベルゼン強制収容所行きとなった(171)。

最愛の娘たちと別れたエーディトは、もはや生きる力を失ってしまったようだ。彼女は高熱を発して病人バラックに収容され、1945年1月6日に死亡した(171)。

## 第11章 終戦と解放——アンネと仲間たちの「命のバトン」

### 解放と帰還

水島によれば、1945年5月、ドイツの降伏によってアムステルダムは解放されたが、無事収容所からオランダに帰還したり、潜伏生活をおえて自由の身となったユダヤ人の多くは、解放の喜びを味わうまもなく、ただちにさまざまな困難に直面した(182)。戦後のユダヤ人社会は、戦前と大きく変貌した。アムステルダムのユダヤ人街の貧困層は、そのほとんどが移送されて殺害され、ユダヤ人の住む街としての役割を喪失したが、市内の他の地区に住む中間層のユダヤ人はある程度生き残ったことから、ユダヤ人社会は

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）中間層主体にシフトした（183）ことは重要であろう。一方、「オランダに住むことをよしとせず、国外に移住する例も多かった」（183）として次のように水島は述べる。

とくにアメリカ、イスラエル、カナダ、オーストリアへの移住が目立った。ただ、イスラエルに移住したのち、ふたたびオランダに戻る例が多かったことは注目される。この「イスラエル経験者」のユダヤ人のなかに、オランダ社会に活躍するユニークな人材が多いのは興味深い（183-4）。

「イスラエルに移住したのち、ふたたびオランダに戻る例が多かった」については、「イスラエルとハマスの軍事衝突」が喧しく報道される昨今、非常に興味を持たれる問題である。

### 子どもたちのその後

「終戦後、とりわけ複雑な問題を引き起こしたのがユダヤ人孤児をめぐる問題だ」（184）として、水島は2つの立場について次のように記す。

一方の立場は、実の両親を喪って養親に慣れ親しんだ子どもたちについて、養親がそのまま育てるべきという考えである。現実には多くの養親がキリスト教徒であることを踏まえると、これはユダヤ人の子どもをキリスト教徒として育てることを意味した（185）。

もう一方の立場は、ユダヤ人の子どもたちはたとえ両親を喪っていても、親戚やユダヤ系の児童施設が引き取り、「ユダヤ的環境」で育てるべきだというものだ。ユダヤ系の委員はこの立場をとり、委員会の多数派意見に抵抗した。その背景には、1000人を超えるユダヤ人の子どもたちが「奪われる」ならば、ホロコーストで大幅に縮小したオランダのユダヤ人社会が断絶してしまうのではないかと、という危惧もあった（185-6）。

水島は「この引き取りをめぐる問題は養親にとって、またユダヤ人社会にとって、そして何より子どもたち本人にとって、つらい思いを強いるものになった」（186）と締めくくる。戦後オランダの社会において重要な問題であったことにある種の感銘を覚えざるにはおられない。

### オットーの帰還

「収容所から解放されたオットーのその後を見てみよう」（187）として、水島は次のように記している。

1945年6月、彼はアムステルダムにたどり着き、かつて潜伏生活を支えてくれたミーブ・ヒースらと再会する。幸いオベクタ商会は事業を継続しており、しかもヒース夫妻が彼に1室を提供してくれたことから、彼のアムステルダム生活の滑り出しは順調だった。彼はアンネの消息を知

る人物として、プリレスレイベル姉妹の存在を知る。7月、彼が訪ねてきた日のことを、姉のリーン・プリレスレイベルはこう語っている。「2人の娘のことを御存知ですか、と彼は尋ねてきました。2人のことは知っていました。でもそれを口にするのは実に荷が重いことでした」。アンネとマルゴの死を聞いたオットーの衝撃は、言い尽くせないものだった (187-8)。

ミーブ・ヒースが引き出しにしまっていたアンネの日記帳やその他、アンネが書いたものを取り出し、オットーに渡したのは、こうしてアンネの死が確定し、オットーが打ちひしがれていたときだった (188)。

オットーがアンネの日記を本格的に読みはじめたのは1945年9月末のことだった (188)。

しかしひとたび読みはじめると、彼はたちまちそのとりこになった。のちに彼は書いている。「日記からは、私の喪った子どもであるアンネとはまったく別の姿が立ちのぼってくる…彼女の内面に何が起きていたのか、率直に言っても私は全く知らなかった」(188)。

### 『アンネの日記』の刊行まで

水島によれば、1946年も春となった4月3日、レジスタンス系の有力紙『ヘト・パロール』の第1面に、オランダを代表する歴史家、ヤン・ロメインの執筆した「子どもの声」と題する記事が掲載された。この記事を読んで連絡してきた出版社が、コンタクト社である。オットーと同社のあいだで契約が交わされ、翌1947年6月25日、ついに『隠れ家』と題してアンネの日記が出版された。同書はただちに話題になり、初版3036部はあっという間に完売する。著名な歴史家たちが書評で取り上げ、アンネ・フランクの名前は広く知られるようになる (191-2)。

### 世界的ベストセラーへ

水島によれば、1952年、『アンネ・フランク—少女の日記』が刊行された。しかし、日記は発売されたものの、売れ行きはしばらくのあいだ、パツとしなかった。しかし『ニューヨークタイムズ・ブックレビュー』に有名作家メイヤー・レヴィンの書評が掲載され、そこで絶賛されると、一気に注目が集まった (194)。

初版5000部は数日にして売り切れ、それ以後2刷 (15,000部)、3刷とつづいていく。まさに「少女の日記が一夜にしてセンセーションを巻き起こした」のだ。さらに各国で翻訳刊行が進み、『アンネの日記』は世界的な名声を博していく。ブロードウェイで上演され、映画化され、70もの言語に翻訳された。今や『アンネの日記』は20世紀を代表する文学作品の1つとして挙げられることも多い (194)。

## 第12章 戦後補償と歴史認識の新展開

### 再燃する補償問題

水島によれば、1990年代以降、戦後補償をめぐる新たな動きが出てくる。この時期、スイスの銀行に残されたユダヤ人資産をめぐる問題が国際的に注目され、アメリカのユダヤ人が中心となってスイスの銀行の責任追及の動きが広がっていった。しかもこのころ偶然、ある学生がアムステルダムの建物の屋根裏部屋で、行方不明とされていたリップマン・ローゼンタール銀行の資料を発見し、その結果、ユダヤ人への補償・返還がいまだ完了していない案件が多数あることが明らかになった（198）。水島は続けて次のように記す。

最終的に1999-2000年にかけて、政府、ユダヤ中央協議会、金融界のあいだで合意が成立する。これにもとづいて政府と金融界は3億4680万ユーロを拠出し、ユダヤ人生存者や遺族、ユダヤ人団体などに補償が実施されることになった（198-9）。

保障と並行し、過去の究明も進んでいる。21世紀に入って歴史研究はいっそう進展し、当時のオランダにおけるユダヤ人迫害への「協力」状況は、徹底して解明されつつある。オランダの官僚、警察官、鉄道事業者などのほとんどは、ユダヤ人迫害を拒むことなく当局の指示にしたがったのであり、その徹底ぶりが犠牲を広げることになったことが、各種の研究で明らかになっている（199）。

多額の補償がおこなわれたことは、ご同慶の至りというべきであろう。それにしても、官僚、警察官、鉄道事業者などのほとんどが、当局の指示に従ったことは、オランダ民主主義の傷というべきであろう。

### 再燃する補償問題鉄道会社の補償とサロ・ミュラー

水島によれば、2019年、オランダ最大の鉄道会社、オランダ鉄道がホロコーストの生存者や犠牲者の遺族に向けて個人補償をおこなうことを決定した、と言う。戦時中オランダ鉄道は、ドイツ当局に全面的に協力し、合計11万人にのぼるユダヤ人、シンティ、ロマの人々を鉄道で移送している。アムステルダムから国内のウェステルボルク通過収容所まで、ユダヤ人らを約200回にわたって移送したことで、およそ250万ユーロ相当の収益を上げたという。これらの事実を踏まえ、約800名の生存者に1人あたり15000ユーロ、遺族に1人あたり5000-7500ユーロが支給されることになった。補償金は総額で4000万ユーロを超える。この補償決定は画期的なこととして受けとめられ、広く報じられたという（199-200）。

終章 明日もきっと、元気でね——トークショーの女王、ソニヤ・バーレント『もう君には会えない』

水島は、2017年に刊行された、オランダでベストセラーになった『もう君には会えない』の著者であるテレビ司会者、1940年にアムステルダム生まれ、ユダヤ人の血を引くソニヤ・バーレントに言及する。「長年にわたりトーク番組に出演し、インタビューを重ねてきた点では、日本の長寿番組、『徹子の部屋』の黒柳徹子に近いだろうか」とバーレントを紹介する(209-10)。実に面白い。

水島によれば、そのソニヤが70代後半になって、みずからを赤裸々に語った半世紀が『もう君には会えない』である。この本のなかでソニヤは、アウシュヴィッツで死んだ父親について、また苦悩を重ねた青春時代について率直に明かし、話題を呼んだ(210)。

「あ、はい」

水島によれば、アムステルダムで両親と3人で暮らしていたソニヤの家を悲劇が襲ったのは、1942年の夏だった。この自宅を突然訪れた2人のオランダ人により、ユダヤ人の父、ダフィット・バーレントが連行されたのである。「もう君には会えない」は、そのとき父が母に向けた言葉だった。そのまま父はアウシュヴィッツで死を迎え、2度と家族に会うことはできなかった(211)。

水島は次のように述べる。

この事件が起こったとき、ソニヤはまだ2歳だった。そのため父の直接の記憶はほとんどなく、思い出のよすがは写真だけだった。ソニヤの母はその後、非ユダヤ人のオランダ人男性と再婚し、2人の男の子が生まれる。しかしソニヤと義父の折り合いは悪かった。生活費を十分家に入れない義父と母はしばしば激しく喧嘩し、家のなかは落ち着かなかった。「あらゆる悲惨の根源は義父だった」とソニヤは回想する(211-2)。

ソニヤが16歳になったある日、彼女は義父と口論の末、ついに家を飛び出す。彼女はアムステルダム市内で自活することを決意し、働きながら夜学に通う生活をはじめた。トイレもシャワーもないアパートを借り、昼は働き、夜は11時近くまで夜学で授業をうけ、暗い道を帰途につく生活が始まった(212-3)。

テレビ界のスターへ

水島はソニヤ・バーレントについて、「彼女以上にメディア人として戦後のオランダ社会に大きなインパクトをあたえた人物はそう多くはいないのではあるまいか」という。すなわち、こうである。

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）

最初は一介の研修生としてテレビ業界に入ったソイヤだったが、たちまちその才能を見出され、1966年にテレビの司会者としてメジャーデビューを果たす。これ以降、数多くの番組のオファーが舞い込み、ソイヤは複数の番組を掛け持ちする。20代後半にして、一気に国民的知名度を誇るテレビのスターになったのである（213-4）。

### 「大いなる秘密」

水島によれば、「トークショーの女王」として多忙な毎日を過ごしつつもソイヤの思いは絶えず亡き父に向けられていた。その間、彼女はユダヤ教に改宗し、ユダヤ人として歩むことを決意している。住まいも基本的に父の思い出の地、アムステルダムの市内に選んできた。

ソイヤは仕事柄、著名人と関わる機会が多く、なかにはソイヤの父について専門的に調査してくれる人もいた。占領期オランダ史の大家だったデ・ヨングも協力を惜しまなかった1人である。協力者たちの調査の結果、ソイヤの父、ダフィットは、1942年6月にハーグに収監され、当地に12月まで留め置かれたのち、アウシュヴィッツに送られ、1943年4月ごろに死亡したことが明らかになった（214-5）。続けて水島は次のように述べる。

実はソイヤには、どうも腑に落ちないことがいくつかあった。そのひとつは、父が1942年6月という早い段階で連行されたことである（215）。

デ・ヨングはこれについて、ダフィットになんらかの嫌疑がかけられたのではないかと推定している（215）。

ソイヤが納得できなかったもうひとつのことは、父と母の関係についてだった。1971年に義父が病死すると、ソイヤはふたたび母とのつながりを取り戻した。そして父のことを知りたいという一心で、いくども父について訊ねている。しかしいくら話を持ち出しても、母からは「もう昔のことだから。忘れちゃった」という返事しか返ってこなかった。ソイヤのもやもやは晴れないまま、母は1993年に他界した（215）。

### 「夫の不貞」

水島の記すストーリーはますます迫力を帯びる。「謎はつづく」（216）と断わって、次のように叙述を展開する。何という筆力であろうか。

ソイヤの母には、「自分に何かあったら開けてよい」と生前に指定していた大事な小箱があった（216）。

そこに入っていたのは、1944年当時の新聞の切り抜きだった（216）。

そこに掲載されていたのは、すでに離婚の成立していたソイヤの両親に関する、子どもたち（ソイヤと弟）の監護をめぐる裁判所の公告だったからである（216）。

その後の調べでわかったことだが、法的には、父と母のあいだでは1944年2月、母からの申し立てによって離婚が成立していたからである。その離婚理由は、「夫の不貞」とされていた(217)。

水島は次のように断言する。圧倒的な迫力がある。

「父の不貞」が現実にあったとはとうてい思えない。考えられるのは、母が(のちの)義父との関係を優先し、父が戻らないことを見越しつつ、結婚関係を清算しようとしたということである。母は、自分こそ他の男性と不倫関係にありながら、「父の不貞」を理由に離婚したのか。何のために新聞の切り抜きを残したのか。ソンの苦悩は深まる(217)。

「ソンの苦悩」は身に沁みてよく理解できる。それが戦時下の状況というものだろうか。評者としては、当時、そのうえ、反ユダヤ主義の恐怖が真底にあったソンの母親の場合、夢中の行動だったのではないかという気もするのである。母親も、結果的には、悲劇の時代の1人という感もしないでもない。

#### 「明日もきっと、元気でね」

水島のこの書の結語は、簡単に読み過ごせない含蓄深いものがあり、感動的なものがある。それは、以下のようになっている。

ソンヤ・バーレントについて、「オランダの夜のテレビ界に君臨した『トークショーの女王』」。縮めの言葉はいつも決まっていた。『それでは、ゆっくりおやすみなさい。明日もきっと元気でね』。明日もきっと、元気でね。アウシュヴィッツで無念の死を遂げた父へ思いを胸に、ソンヤはどんな願いを込めてこの言葉を毎晩、数百万人の視聴者に語っていたのだろうか(218)。

アンネ・フランクとソンヤ・バーレント、2人の女性の受難を奥深く語りながら、ナチスの大量殺伐を蒙る移民都市アムステルダムのユダヤ人というテーマを縦横に論じた名著にふさわしい象徴的なメッセージであると思う。

### 3. いくつかの論点

#### 序論

著者水島は別の文献でアンネ・フランクについて次のように言う。すなわち、「オランダで一番有名な人と言えば、アンネ・フランクである。水島はアンネ・フランクが今から80年前に、望まざるステイホームをせざるを得なかったことに注目する。第2次世界大戦中、ドイツは占領地域でユダヤ人の迫害を大規模に進めて多くのユダヤ人が強制

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）収容所で死んだわけだが、その一人がアンネ・フランクであった。アンネ・フランクの場合、多くのユダヤ人と違っていたのは、2年間にわたり隠れ家に住んだことである。そこで彼女が綴っていたのが『アンネの日記』であるが、水島によれば、アンネ・フランクの言葉の中には、「この数ヶ月の日本人の私たちの経験と共鳴する部分があると思います」と言う。水島はアンネの次の言葉を引用している。「ひとと話したい、自由になりたい、お友達がほしい」（水島 2021, 105）。まことに優れた着想である。

水島は、本書の「あとがき」で次のように言う。

「本書はアムステルダムのユダヤ人の織りなして織りなしてきた歴史に光を当て、その現代につづくインパクトを意識しつつ、とくに人物を軸として論じたものである。そのさい本書では、アムステルダムという町の特徴、とくに「隠れ場と広場」という、独特の都市空間の存在に注目した」（219）。

その意味で「隠れ家と広場」は、アムステルダムという都市を理解する隠れた軸であり、とりわけユダヤ人にとって重要な意味を帯びた空間だった、という都市社会学的なアプローチとなっている。

#### 緩やかに始まった、ナチスの占領政策

オランダ史学者桜田美津夫はオランダの1940年の降伏について、次のように語り始める。

フランスのナポレオン帝国に編入されてから130年後、オランダは、今度はドイツのヒトラーの第3帝国に呑み込まれることになる（桜田 2017, 232）。

ヒトラーは、ヴェルサイユ体制への復讐心とユダヤ人に対する人種的偏見に突き動かされ、議会選挙での多数派獲得という一応は正当な手段により、1933年1月、ついに政権を掌握する。彼は政権に就くとユダヤ系市民の組織的排斥に着手する。それは1938年11月の大規模なユダヤ人迫害、いわゆる「水晶の夜」以降いっそう激化する。先見の明があり、資力もある少数のユダヤ人たちだけが、いち早くドイツを脱出した。その中にはフランクフルト・アム・マインに住んでいたユダヤ人銀行家オットー・フランクの姿もあった。彼は、アムステルダムで新しい事業を起こすことに決め、次女アンネ・フランク（1929～45）を含む他の家族をこの街に呼び寄せた（同、232-3）。

アンネ・フランク一家がアムステルダムにドイツから移って来たことがポイントである。一家にとってアムステルダムは自由の地であったはずであった。

しかしながら、ヒトラーは、1939年以降、築き上げた体制を維持するため、ヨーロッ



バ制覇という野望を実現するため、侵略戦争を始め、ユダヤ人迫害を新たな征服地にも押し広げていく(233)。1940年5月10日、ドイツ軍は、オランダとベルギーにも宣戦布告なしに複数の地点から侵入した。

ドイツ軍侵入後、5月13日、ウィルヘルミナ女王とその家族、そして内閣の閣僚たちはロンドンに亡命した。オランダ軍は暫時抵抗を試みたが、14日にロッテルダム中心部がドイツ軍の空爆によって徹底的に破壊された後、他都市を同様な運命から救うためには抵抗を中止するしかなく、15日、オランダはドイツに降伏する(233)。

### オランダ占領の目的とユダヤ人迫害

「ドイツ占領機関は、まずオランダ人を味方につけるため、ユダヤ人迫害に性急にはとりかからなかった。その対ユダヤ人政策は周到かつ緻密なものだった」(236)と桜田は言う。

すなわち、1941年2月に、ドイツ占領機関は、アムステルダムのユダヤ人たちに「ユダヤ人評議会」を作らせた。水島は「ユダヤ人協議会」と訳していることを付言しておきたい。ユダヤ人評議会はユダヤ人に自治を認めるように見せかけて、その実、ナチスのユダヤ人一掃政策をより効率的に行うための巧みな仕掛けであった(236)。

桜田によれば、すでに1940年11月にユダヤ人の公務員が解任され、41年には、ユダヤ人は自ら名乗り出て登録することを求められていたが、その後ユダヤ人たちはしだいに行動の自由を奪われていく(236)。1942年7月「労働奉仕」という名目でのユダヤ人のドイツへの移送が始まる(236)。このようにしてオランダでは、ナチスがもくろむ「ユダヤ人狩り」がヨーロッパのどの国よりも効率的に実施された(237)。続いて桜田は次のように問題を立てる。

ドイツ占領機関がオランダのユダヤ人として把握したのは14万人余り。このうち圧倒的多数の107,000人が、1942年7月15日から44年9月17日までの間に、国内の中継地点であるドレンテ州のウェステルボルクを経て、ヨーロッパ東部の絶滅収容所へと移送され、生還できたのは約5,200人であった。したがって、この戦争中のホロコーストを生き延びられたオランダのユダヤ人は約27%にすぎない。ベルギーは60%、フランスは75%、ノルウェーは60%、デンマークは98%のユダヤ人が難を逃れているなか、オランダ・ユダヤ人の生存率の低さは際立っている(237)。

「オランダでは、ナチスがもくろむ『ユダヤ人狩り』がヨーロッパのどの国よりも効率的に実施された」ところがポイントである。言い換えれば、『アンネの日記』の底流

水島治郎『隠れ家と広場 移民都市アムステルダムのユダヤ人』（みすず書房、2023年）にあるのは「ユダヤ人狩り」、すなわち、ホロコーストである。それではホロコーストとは何だったのかということになる。

ホロコーストとはなにか

「ホロコースト holocaust とはなにか——。現在では、特にナチ・ドイツによるユダヤ人大量殺戮を指す。第2次世界大戦がはじまった1939年からナチ・ドイツが敗北する45年5月までの間に、およそ600万人のヨーロッパ人が殺害された。一民族がこれほど多く、組織的に殺されたケースは歴史上存在しない。」（芝2011, i）と、ドイツ現代史学者芝健介は、彼の著書の「まえがき」冒頭で述べる。

しかし、ホロコーストは、ヒトラーという狂気に満ちた独裁者の命令によって実行されたととらえがちであるが、事実はそのように単純ではないと、芝は言う。芝は続けて次のように説明するところが重要である。

その背景には、まずヨーロッパ社会が伝統的に抱えていた反ユダヤ主義があった。一人の独裁者だけでなく、一般の人々にもユダヤ人を嫌悪する意識が深く浸透していたのである。ヒトラーが率いるナチ党（国民社会主義ドイツ労働者党）は、反ユダヤ主義を巧みに政治に取り込み、政権を獲得している（同, ii）。

「だが、ヒトラーもナチ党幹部も、当初よりユダヤ人の大量虐殺を考えていたのだろうか。」（ii）と芝は問う。芝によれば、の歴史を繙くと、そこから見えるのは、ユダヤ人政策の迷走である（ii）と言う。芝は続ける。

1933年にヒトラーが政権を獲得してはじまったユダヤ人弾圧政策は、当初、ドイツからユダヤ人を「追放」することであった。当時、ドイツ国内のユダヤ人は約56万人である。ナチ党はユダヤ人をゲルマン民族に害毒を振りまく劣った民族と規定し、さまざまなユダヤ人への差別規定を設け、パレスティナのユダヤ人機関とも協定を結び、ドイツからの追放を画策した（ii）。

芝によれば、ナチスはドイツ人に土地を与えるため、ユダヤ人を「ゲットー」という指定された居住区に集住させていく。この時点でもナチスはゲットーに集住させたユダヤ人をソ連への侵攻後、「東方」の地に追放しようと考えていた（iii）。

芝はこう続ける。

しかし、ソ連領内にはさらに300万人に及ぶ膨大なユダヤ人が存在したため、ナチスは行動部隊と呼ばれる約3000人の殺人部隊を組織し、1941年6月のソ連侵攻とともに、同領内のユダヤ人の大量射殺を開始する。年末までに彼らが殺害したユダヤ人は少なく見積もっても約50万人にのぼる（iii）。

このあたりで、ナチズムのユダヤ人政策の迷走について、芝言説の検討は終えたいと思うのであるが、『アンネの日記』の背景の深刻さに瞑目せざるをえないと考えている。

### 『アンネの日記』の訴えるもの

おわりに、『アンネの日記』について、触れておきたい。評者が感銘するのは、アンネが次のように書き記している箇所である。

「どんな富も失われることがあります。けれども、心の幸福は、いつきおおいかくされることはあっても、いつかはきっとよみがえってくるはずです。生きているかぎりには、きっと。孤独なとき、不幸なとき、悲しいとき、そんなときには、どうかお天気のいい日を選んで、屋根裏部屋から外をながめる努力をしてみてください。街並みだの、家々の屋根を見るのではなく、その向こうの天をながめるのです。恐れることなく天を仰ぐことができるかぎりには、自分の心が清らかであり、いつかはまた幸福をみだせるということが信じられるでしょう（フランク 2010, 339）。

なんと、切れ味のよい清純で率直なメッセージであろう。年少の少女にしては感動的なものがあるが、年少だからこそできるのだろうか、それとも、年少にもかかわらず、優れているのだろうか？

同じように、戦時下、占領下であるからこそ、冴えているのか、それともそこに、普遍的に響く魂の声を感じ取るべきなのであろうか。

いずれにせよ、「いつかはまた幸福をみだせるということが信じられる」結果にならなかったことは、反ユダヤ主義ナチスの占領下にあったオランダという国、アムステルダムという都市の、悲劇を思わずにはいられないのである。

### 参考文献

- 桜田美津夫（2017）、『物語 オランダの歴史 大航海時代から「寛容」国家の現代まで』、中公新書。
- 芝 健介（2011）、『ホロコースト ナチスによるユダヤ人大量殺伐の全貌』〔3版〕、中公新書。
- 水島治郎（2023）、『隠れ家と広場：移民都市アムステルダムのユダヤ人』、みすず書房。
- フェルカーフェン、リアン（水島治郎・佐藤弘幸訳）（2022）、『アンネ・フランクはひとりじゃなかった——アムステルダムの小さな広場』、みすず書房。
- フランク・アンネ（深町真理子訳）（2010）、『アンネの日記』〔第4刷〕、株式会社文藝春秋。